第１章　「もの」と「こと」の意味論⑨

前おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

第九節　「もの」と「こと」の対比図式論

ギリシャ哲学、とくにアリストテレス研究で知られる出隆(1892～1980)の著書『パンセ』に収録されている〈「もの」と「こと」によせて〉の論考を『現代哲学辞典』（講談社現代新書）は参考文献としてとりあげ、同辞典の市川浩と共同編者でもある山崎正和は次のように「もの」と「こと」を対比してまとめている。

まず「物」と「事」については、各種辞典にみられるように、「物」というのは、また「者」であり、「事」というのは、また「言」であり、「異」であり、「殊」でもあるとし、「もの」という日本語は、何であれ一つにまとめ、つかねて言う場合に用いると説明したあとで、「こと」については、次のように要約解説する。

「もの」が「何か」を指示するとすれば、「こと」は「如何に」を指示する。したがって「こと」は、ものの「働き」「作用」「所作」「状態」「様相」「性質」「関係」をあらわす。「こと」とは、判断・命題・文で示され得るような、ものの在り方を、一般的に支持する語であるという。「ものものしい」とは、「何かのもの」に重点をおいた言い方であって、何か自己同一的なるものが姿をあらわしている、という意に由来する。「ものものしい」に対して「ことごとしい」とは、「如何なることか」に重点をおいた言い方であって、何かが出現してきたという意に由来する。それは、常でない、異常である、という意味で「異」なっているのであり、特殊的であるという意味で、「殊」に注目されるのである。「素破（すわ）、事だ」というのは、この用法であって、それは常ならぬ事件となるぞ、の意である。

天理王命の「命」とは、「御尊」あるいは「御命」というのと同義で「御事」に由来し、常ならぬ、特殊な、高貴な人、あるいは高貴な存在の意であると解される。また、「言」というのは、ものの表現・表出の仕方、ものを表現し現す在り方、の意であるとする。「ことはじめ」とは行事のはじめの意であり、「静かなること林のごとし」における「こと」とは、「陣営が静かである」という、その在り方、を意味している。一方「戦争というもの」というのは、戦争が「何か自己同一的なあるもの」として考えられているという意を示しており、「戦争ということ」というのは、「A国とB国とが戦争する」という命題、あるいは、そういう命題で示される事件・状態・在り方が考えられているという意味であると説明される。「ものごと」（物事）というのは、何か自己同一的なるものの在り方、を意味しているというわけである。

「ことわり」「ことわけ」というのは、「こと」即ち、事件・状態・関係に分け入り、その成り立ち・筋目を明らかにする意に由来する。それは、在り方の文節であり、事情の分析であって、そこに、物の道理が現れる。「天理」の「理」はその意味を有すると言える。身体が神からの「かしもの・かりもの」であるという天理の基本思想は、身体という「もの」は自己同一なるものであるから割ることができぬが、「こと」は、自由に使える「もの」として神から「陽気暮らし」を目的に人間に等しく与えられたこころがつくりだすものとしてのさまざまな在り方・関係・所作であるから、主語と述語とに割ることもできるわけであり、そういう成り立ちのものであるということができよう。

出隆は中等学生向けの国語辞典甲乙二種と大言海の「こと」「もの」を克明に比較し、その説明の仕方に有る有機的な統一整理の不備不用意を克明に指摘したうえ、以上のように要約された氏の論考の最後において「ものになる」というのはばらばらに分かれている「こと」がまとまるのであるといい、「いろいろの仕事がまとまった金になるのであり、あれこれの試みが一つの効果を収めるのである。そのように、集合するものとす」の「もの」は何のことはない集合すべき「きまり」になっているというのであり、すでに「ことわり」であって今では一つの「規則」として何らかの客観的にまとまっている点で「もの」なのであると言う。したがって、その他もそのように、「もの」は一つにまとまっており「こと」は二つに割れている。日本語でただなんとなくわかっているだけでは未だ分かたれない「もの」か、或いは何か「こと」であるから、さらにそれをわかった「もの」にせねばならないと結論付けている。

出隆はかつて立教大学の『哲学会時報』に「ものとことの問答」と題して「ものはそのわけを問うと直ちにことに割られるが、かくもののことわりがわかると、そのまことなるものに帰り高まる。此れが弁証法である。」と書いている。そのように述べた後、以下のような「もの」と「こと」の注目すべき対比要素を追記しているので、その項をここに引用しておきたい。

> 今は、弁証法とまで飛躍させようとは思わないが、とにかく、さきに言ったように、「もの」には、それのいずれかの場合にも何か一つにまとまってる性格があり、これに対して、「こと」は、言葉としては、「この花は白い」のようにまとめていう言葉であるが、それのさす「こと」それ自らに即して言えば、そのいずれの場合にも何らか主語と述語との或いは主体と客体との或いは問いと答えとの二つに割れてるといったような性格をもつと言えよう。すなわち、「もの」を同一的・一体的・統一的・独存的・求心的と言えるとすれば、「こと」は異別的・両頭的・分裂的・関係的・遠心的とでも言えようか。とにかく、何かこのように解しこのように区別するとき、我々は一層近く「もの」や「こと」の本質に肉薄しまた一層広くそれぞれの場合をつくし得るのではないかと思う。

ちなみに「もの」と「こと」と対比図式解釈については、比較文化論専攻の荒木博之著『日本語から日本人を考える』（朝日新聞社、1980年）は必読の書である。荒木は「もの」と「こと」との対比を、「原理・法則・不変」対「非原理・一回性・可変」といった図式で考えをすすめていく。そして口承文芸論、民間文芸論のなかで対比的に扱われる「ものがたり」と「ことわざ」についても、この図式は有効なのかどうかを議論している。その理由は「ものがたり」という概念が曖昧模糊と安易に使われてきた傾向があるうえに、「ことわざ」についても、それを「ことのわざ」、つまり「言葉の技芸」とする柳田国夫以来の解釈が、一片の疑いもなく見過ごされてきたからであるという認識からであるという。荒木の議論の結論にしたがえば「元始まりの話」や「こうき話」の「ものがたり」が「世の原理・法則」を知らしめるための説話ということでなければならなくなっていく。「ものがたり」を「もの」を神と定位する立場からの集団に是非語り伝えねばならない神聖な「カタリゴト」とする荒木氏の説を援用して次号ではさらにあらたな問題提起をこころみたい。